

「イメージ奏法」による協働学習により、ダイバーシティを受容し インクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育

— 中学校の音楽の授業実践における合唱指導報告 —

Music education using the "Image Method" to foster the Diversity & Inclusive leadership
— Practical report for choral guidance in junior high school —

武本京子

山口茉莉子

Kyoko TAKEMOTO

Mariko YAMAGUTI

要 約

音楽作品の演奏を筆者武本が考案した「イメージ奏法」(武本1995,2013,2018,2019)の理論を基に「イメージ楽譜」や「イメージ映像」を活用して音楽を可視化することにより、教師と生徒たちが、互いに感じている音楽から導かれたイメージの多様性を認め、協働学習により、心一つにまとめていく方法を提案する。合唱コンクールに向けて一つの音楽解釈へ集約するためには、生徒たちは、練習の積み重ねの中からお互いの個性を踏まえた人間の感情の多様性(ダイバーシティ)を認め、集団的アイデンティティを高め、インクルーシブ・リーダーシップを発揮する人財が必要とされる。本稿では、筆者山口が「イメージ奏法」を応用した中学校の音楽の合唱という授業において、多くの人数で一つの音楽解釈にまとめる過程で、ダイバーシティ(多様性)とインクルージョン(受容)を何回も繰り返す練習により、共感を促進し、向社行動を学ぶことができた取組を報告する。その結果、学校現場での音楽教育がインクルーシブ・リーダーシップを育成し、協調性や汎用的能力の育成を行うことができることを考察し、音楽教育の必要性を発信したい。

Keywords : イメージ奏法 音楽教育 ICT ダイバーシティ インクルーシブ・リーダーシップ 合唱

I はじめに

新しい発明が次々に社会の仕組みを変え、インターネットの普及により紙媒体の価値は絶対的なものではなくなった。企業においても、AIの発達から、知識の丸覚えではない、ダイバーシティ&インクルージョンという考

え方が浸透し、人財のダイバーシティ(多様性)をお互いにインクルージョン(包摂)することが企業の持続的成長に必要なであるとの見解を示す企業が増えてきた。また、外国人が来日したり、就業する数が増え、国籍、人種、民族などをはじめ、社会的地位、性別、性的指向、年齢、障がいの有無などにその多

「イメージ奏法」による協働学習により、ダイバーシティを受容し
インクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育（武本京子 山口茉莉子）

様性をお互いに尊重し、認め合い、成長することが大事であるとされる世の中に様変わりした。こうした時代背景を受け、中学校の音楽の授業においても「知識や技能の習得」とともに「思考力・判断力・表現力」の育成と「学びに向かう力・人間性など」の涵養などが目標とされ、音楽の授業が「生活や社会と関連づけること」、「主体的で対話的な深い学び」や「カリキュラム・マネジメントの実現」などに取り組むように求められている（中学校の新学習指導要領2017）。また、特別活動の学芸的行事にあたる合唱コンクールは、学年を超えて平素の学習活動の成果を発表し、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しむことを協働的に行うことができる取組である（文部科学省、2008）。

本稿では、「イメージ奏法」を応用し、ダイバーシティを受容し、インクルーシブ・リーダーシップを育成する合唱の授業の実践を通して、中学校音楽教育の人間力育成について検証していく。

Ⅱ 音楽による感情の多様性の受容から、 インクルーシブ・リーダーシップを育成する 「イメージ奏法」による音楽教育

筆者武本は、テクニック重視の演奏ではなく、音色に気配りし、音楽の内面を可視化させて表現力豊かな演奏をするために、独自の演奏法を開発した。その演奏法は、図1の手順のように楽譜から作曲者の意図を読み取り、表現したいイメージを音色や言葉で可視化させ、どんなことを表現したいのかをまとめた「イメージ楽譜」（演奏設計図）を制作する。そして、楽曲を演奏するために、①指の角度、②打鍵の深さ、③腕の使い方、④体の使い方、⑤握力の使い方、⑥打鍵のスピード、⑦間の使い方などの具体的奏法を導く

「楽曲イメージ奏法」という演奏法を確立した（武本1995）。これは、図1のように中学校の学習指導要領の目標（1）に該当する。

学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(1)
中学校目標 (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解すると共に 創意工夫を生かした音楽表現するために必要な技能を身に付けるようにする
1 楽譜から作曲者の意図をくみとる 作品の背景（生い立ち、性格、その時代の社会情勢）と楽曲分析をする
2 「イメージ楽譜（演奏設計図）」を作りイメージを明確にする→視覚化する
①イメージを表す言葉（イメージ語）を探す ②イメージグラフを作成して全体の構成を考える ③イメージ語の変化の流れから物語をつくる ④物語を奏でる時の音が創り出す立体的空間や呼吸の世界を 表現曲線として描き、タッチを導く手がかりを作る ⑤表現曲線にもとづいて、奏法を導く色を楽譜にぬる
「イメージ奏法」は曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解する

図1 学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(1)

① 個人の多様性（ダイバーシティ）を認める

筆者武本が開発した「イメージ奏法」では、音楽を自分が一番理解できる方法で可視化する「イメージ楽譜」を作成することに特徴がある。音という消えていくものを可視化することにより、音から形作られた創造力の育成が目的である。

【イメージ語】

この図2は、筆者武本の著書の音楽之友社から出版している『ピアノを学ぶ人へ贈る武本京子のイメージ奏法解説書』にある「イメージ語表」である。これは、人間の感じる感情の外的、内的、明暗などにより、Aは、外的でポジティブの意味を持つ言葉。Bは、内的でポジティブの意味を持つ言葉。Cは、内的でネガティブの意味を持つ言葉。Dは、外的でネガティブの意味を持つ言葉が記されている。これらは、時代と共に変容しており、この表に自分がよく使う言葉を足し、イメージを膨らませ、全体を見渡す。そして、楽曲が何を伝えたいかを考え、「イメージ語」を楽譜に記載する。そして全体の構成を考え、愛、自然、社会問題、人間を取り巻く様々な

ことを視野に入れながら、その曲で何を一番伝えたいのかを考える。

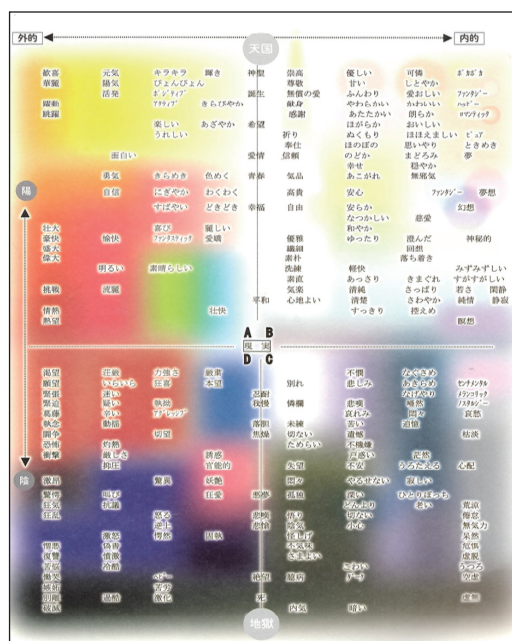


図2 武本京子の「イメージ奏法」解説書より「イメージ語表」

の中でその部分の役割を考えながら、伝えたいイメージを誘導する色を着色していく。人間の感情を表す色は様々である。イメージを表現するための「表現曲線」や「イメージカラー」の選択もまた多種多様である。教師は、生徒のダイバーシティを受容し、作曲的に分析した音楽の要素からハーモニーや構成などの音楽的要素などを説明しながらディスカッションする。なかなか言葉にして発表できない生徒も、絵、画像、写真、色、ポエムなど自分が一番表現できる方法を探し発表する。そこから生徒は、音楽から多様なイメージが浮かぶことを知る。それは音楽を通して自分自身を表出していくことにつながる事となる。

② 集団的アイデンティティを高める

筆者武本は、「イメージ奏法」の方法を行うことにより、生徒が主体性を持って音楽作品に取り組み、それぞれの解釈を生徒全員で共有、対話し、互いのダイバーシティや違いを認めながら、演奏者がより自分のイメージを明確に共感覚させる視聴覚融合の教育法に発展させた(武本2013)。これは、図4のように中学校の学習指導要領の目標(2)に該当する。「イメージ奏法」では、音楽の中から生徒の心の中にある感情を表出させ、それを「イメージ楽譜」や「イメージ映像」などで可視化することにより、感情の多様性を知り、ICTを使って生徒同士がイメージを共有することによるアクティブ・ラーニングを実践する教育法を提案している。音楽作品のイメージを共有し、討論することは、互いの人間性や考え方を現実の学校生活とは違った空想の中で話として討論できる利点がある。音楽を媒介に生徒たち自身が自分の考え方や他者の考え方を知り、認めていく過程は大変重要である。



図3 武本京子の「イメージ奏法」解説書より「表現曲線」と「イメージカラー」

【表現曲線】【イメージカラー】

図3に示されたような各フレーズを奏でる時、音が創り出す立体的空間や呼吸の方法を「表現曲線」として楽譜に描く。全体の構成

「イメージ奏法」による協働学習により、ダイバーシティを受容し
インクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育（武本京子 山口茉莉子）

課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）は、合唱などのように学級全体で一つのものを作り上げていくことで学んでいくことができる。音楽の曲想を全員で合唱するという事は、多様な考えの中から、一つの方向性を決め、全員で一丸となってその表現の成就に向かっていかなければならない。その過程で、意見の違いをどのように他の意見と納得いくまですり合わせていくかが大切である。その中から集団で心をついにまとめていくための「イメージ奏法」による集団的アイデンティティが生まれるのである。これにより、生徒たちは、集団的アイデンティティを高め、クラスの連帯意識を高めたり、高揚感、やる気を高める作用がある（武本2017）。

また、「イメージ奏法」は、音楽の授業を知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、スマートフォンなど手軽にイメージを具現化できる機器を使い、生徒が表現しやすい方法を活かし、ICTを活用したアクティブ・ラーニングの実践方法である（武本2017, 2018, 2019）。

学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(2)
<p>中学校目標(2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽表現が苦手、経験が少ない生徒にとっても、思いや意図を視覚化する手段として、イラスト・曲線・色・アイコンを使用することができる。 それが教師に伝われば、音楽表現の指導やアドバイスによって生徒の思いに寄り添った表現に導くことができる。 教師の指導にとっても視覚化することは、短時間で生徒の思いを読み取ることができるなど、メリットが多い。 ABCDに感情を分けた座標を使い、曲の感情の起伏を表すことで曲の特徴をつかむことができ、鑑賞の活動にも導入できる。
「イメージ奏法」は、音楽表現を創意工夫して思いや意図を視覚化する

図4 学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(2)

音楽を共有するための客観的「イメージ映像」を制作し、演奏者の心の中を視聴覚融合

で共有することにより、音楽の中に隠された多様な情動、感情、思想、心理学的に考察するように発展した。つまり、図5のように、中学校の学習指導要領の目標(3)に該当する。

学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(1)
<p>中学校目標(1) 曲想と音楽の構造や背景などの関わり及び音楽の多様性について理解すると共に創意工夫を生かした音楽表現するために必要な技能を身に付けるようにする</p> <p>1 楽譜から作曲者の意図をくみとる 作品の背景（生い立ち、性格、その時代の社会情勢）と楽曲分析をする</p> <p>2 「イメージ楽譜（演奏設計図）」を作りイメージを明確にする→視覚化する</p> <ul style="list-style-type: none"> ①イメージを表す言葉（イメージ語）を探す ②イメージグラフを作成して全体の構成を考える ③イメージ語の変化の流れから物語をつくる ④物語を奏でる時の音が創り出す立体的空間や呼吸の世界を表現曲線として描き、タッチを導く手かりを作る ⑤表現曲線にもとづいて、奏法を導く色を楽譜にぬる
「イメージ奏法」は曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解する

図5 学習指導要領を実践するための「イメージ奏法」(3)

③ インクルーシブ・リーダーシップを育成する

「イメージ奏法」は、多様なイメージを共有しながら、集団の中でそのイメージの一つの考えに集約していく手段として、ICTを使ったアクティブ・ラーニングによる話し合いを行っている。教師や特定の生徒の意見に従うのではなく、生徒一人ひとりの発想力を認めながら、協働学習を重ねる中で、協調性やコミュニケーション能力を学ぶことができる。他の生徒の先頭に立って集団を引っ張る力とともに、サポート役に回り集団を導く力が大切であり、お互いの個性や強みを引き出し活かすことが大切である。「イメージ奏法」は、このような教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自らの課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、インクルーシブ・リーダーシップを育成することを重要視している。

なぜならば、音楽のイメージは多様で無限であり、ダイバーシティを受容できる幅が広いからである。

Ⅲ 「イメージ奏法」の教育への適応 －「イメージ奏法」の中学校の合唱指導実践－

1 目的

「イメージ奏法」を使って合唱コンクールを目指す学級の取組を通して、生徒たちが楽曲に対する互いのイメージを「イメージ楽譜」で共有することにより、合唱曲を通じて、それぞれの生徒のダイバーシティを認め、集団的アイデンティティを高めインクルーシブ・リーダーシップを育成する取組の実践報告を行い、その方法を提案したい。

2 対象

本研究の対象は、筆者山口が担当する中学校1校の3年生5クラス（男女はほぼ同数）とした。研究教材は、毎年行われる合唱コンクールで学年合唱として歌う「大地讃頌」とし、練習期間は、7月から10月（8月を除く）の3か月であった。

倫理的配慮として、対象校の学校長に研究目的、方法等の了解を書面で得た。

3 「イメージ奏法」による大地讃頌の合唱実践

まず、アンケートを行いその後、歌詞の解釈をする。そこから各パートに分かれ音取りを行う。ここでは専門のCDを使用し、各パートリーダーを主に練習していく。ある程度歌えるようになったら表現曲線ガイドライン(図13)を配付し、「イメージカラー」、「イメージ楽譜」を【引用・参考文献】14.武本京子「ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の『イメージ奏法』解説書」音楽之友社、2013年、pp.1-40. を基に創作していく。完成し、クラスでディスカッションした後、合唱を行いまとめていく。以上の順で実践を行う。

① アンケート調査の方法と結果

始めに、音楽と自分の性格について、タイプを把握するため、6つのアンケートの質問を出題し、以下のような結果となった。

- A) 音楽は好きですか、の質問に対し、約半数の生徒が好きと示し、嫌いな生徒は約1割であった。
- B) 音楽に関わる習い事はしていますか、の質問に対し、過去に習っていた生徒を含めると、約6割以上の生徒が何かしらの楽器を習っていたという回答であった。このなかでも約半数以上がピアノを示しており、他には、ヴァイオリン、歌、琴、ギター、ドラムが挙げられた。
- C) 歌うことは好きですか、の質問に対し、約7割の生徒が好きと示したが、このなかの2割近くが、一人で歌うのは嫌いだ、全員で歌うのは好きだと回答した。
- D) 外交的な性格か内向的な性格かの質問に対し、コミュニケーションを得意とする外交的な性格か内向的な性格を若干上回ったが、特に大きな差は見られなかった。
- E) 集団行動に抵抗がありますか、の質問に対し、約1割の生徒があると回答し、約半数近くの生徒が抵抗をあまり感じていなかった。
- F) 友達に積極的に話しかけることができますか、の質問に対し、6割弱の生徒が積極的に話せると回答し、苦手と回答した生徒は1割に満たなかった。

以上の結果より、音楽を共有して楽しんでいる生徒が多く、また普段の生活においても音楽が身近にある環境で過ごしているということがわかった。性格関係においては、ほとんどの生徒が外交的で集団行動に対して抵抗がないと回答しているが、中にはクラスになじめず、保健室で相談を受ける生徒や休みがちになる生徒も見受けられる。

② 詩の朗読と音取りを行う

次に「大地讃頌」の歌詞を全員で朗読し、グループで話し合いをしながら詩の解釈を行う。そこから各パートに分かれ、パートリーダーが主体となり、音取りをしていく。ここでは、ピアノの音源を使ってパートごとに練習を行う。

③ 個人のダイバーシティ（多様性）を認め、自己肯定感を育てる「イメージ楽譜」の作成を行う

そして、指導者による「表現曲線」と生徒の考えをまとめた詩の解釈が記載された楽譜を配付し「イメージ楽譜」を作成していく。ここで、生徒たちに「イメージカラー」、 「表現曲線」を付けさせ、自分だけの「イメージ楽譜」を作成する。以下が配付した「イメージ楽譜」の基になる表現曲線ガイドライン付き楽譜である。

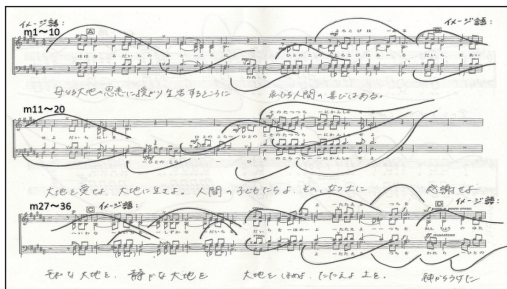


図6 教師からの表現曲線ガイドライン前半

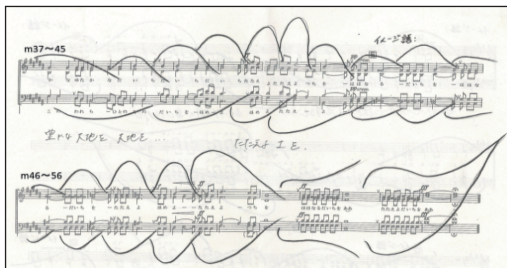


図7 教師からの表現曲線ガイドライン後半

その楽譜を基にグループ、そして全体で共有しディスカッションを行う。他の生徒がどのような色、言葉で表現しているのかを観察し、話し合いの下、一つの楽譜にまとめ、クラスの思いを一つにし、合唱に入っていく。自分たちの「イメージ楽譜」を踏まえ、クラスで一つの楽譜を仕上げるため、個人のダイバーシティを認め、自己肯定感を育てながらディスカッションを行う。

以下は選ばれた作品と作者の性格を比較したものである。積極的な子、おとなしい子、運動をやっている子など、性格も好みも全く異なる生徒A, B, C, D, E, Fの6人を対象とする。

● 生徒A

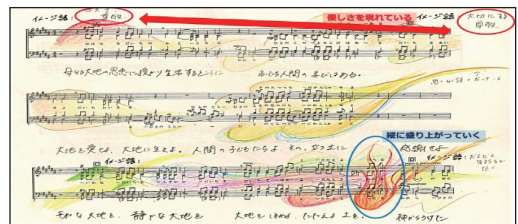


図8 生徒Aの「イメージ楽譜」前半

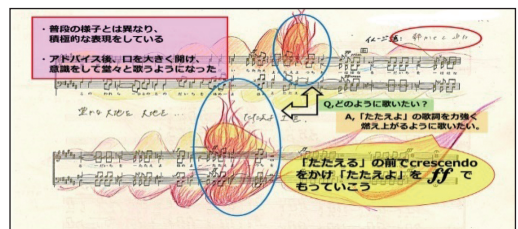


図9 生徒Aの「イメージ楽譜」後半

【楽曲分析】

出だしの「イメージ語」は、壮大・尊敬から始まり、20小節目、36小節目に向けて思いが強くなっていく。それを上昇する「表現曲線」で表している。後半の37小節目からは「イメージカラー」も赤を入れていき迫力を表現

している。

【まとめ】

「イメージ語」は、尊敬、大切など優しい言葉を使っているが、「表現曲線」では、縦に燃え上がっていく表現が何度も出てくる。上に向かって「表現曲線」を表現する生徒はほとんどおらず、「イメージ楽譜」を創ってみて、何か感じたこと、気付いたことはありますかという事後アンケートでは、自分らしい表現ができた。「表現曲線」「イメージカラー」がスムーズに思い浮かべた。と積極的な一面をみることができた。

● 生徒B

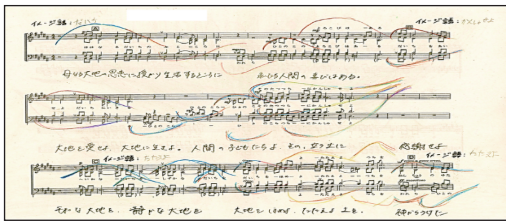


図10 生徒Bの「イメージ楽譜」前半

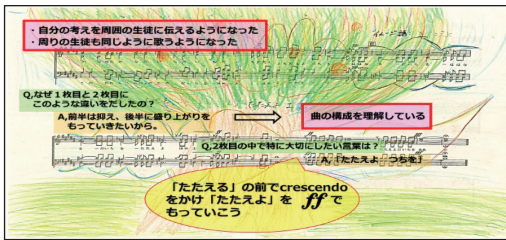


図11 生徒Bの「イメージ楽譜」後半

【楽曲分析】

出だしの「イメージ語」は、感謝から始まり、後半では全体的に盛大な作品となっている。

【まとめ】

「イメージ楽譜」2枚目では、「表現曲線」も消えるほどの大きなスケールで、他の生徒にはない独特の世界観がある。彼の事後アンケートでは、この一回で歌に対して何が変化

したのかわからないが、またやりたいと積極的な回答を残していた。

● 生徒C

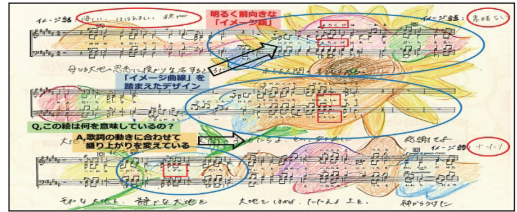


図12 生徒Cの「イメージ楽譜」前半

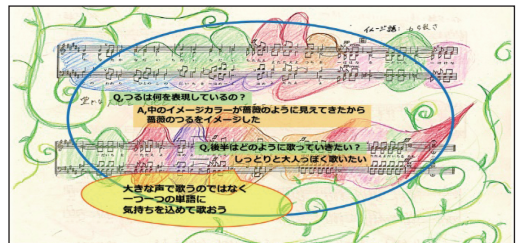


図13 生徒Cの「イメージ楽譜」後半

【楽曲分析】

1～20小節目の「イメージ語」では優しい、微笑ましい、素晴らしいといった明るい言葉を多く使っており、「イメージカラー」も黄色、オレンジといった明るい色をメインに出している。後半からは、「イメージ語」を力強さとし、「イメージカラー」も黄色から赤、紫色を使い、雰囲気を変えている。

【まとめ】

彼女の「イメージ語」は、優しい、ほほえましい、素晴らしいと明るく、前向きな言葉を多く使っており、「イメージカラー」も明るく、彼女の性格がそのまま表れているように思われる。また、「表現曲線」を踏まえながらデザインしているところも注目のポイントである。事後アンケートでは、とても楽しく、またやりたいと肯定的な回答であった。

「イメージ奏法」による協働学習により、ダイバーシティを受容し
 インクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育（武本京子 山口茉莉子）

● 生徒D

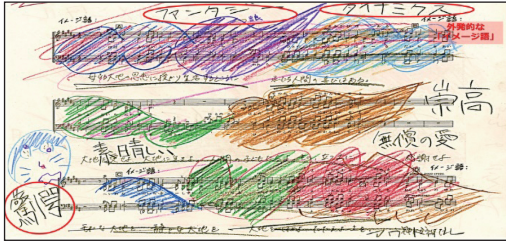


図14 生徒Dの「イメージ楽譜」前半

● 生徒E

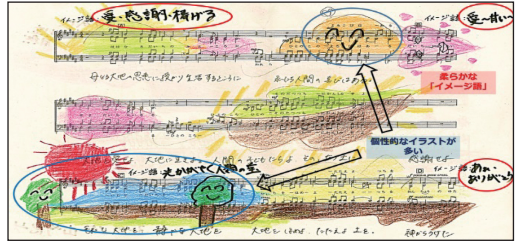


図16 生徒Eの「イメージ楽譜」前半

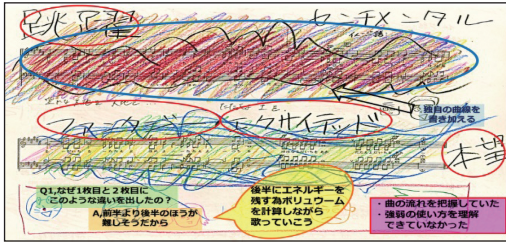


図15 生徒Dの「イメージ楽譜」後半

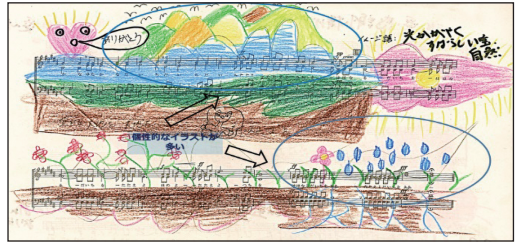


図17 生徒Eの「イメージ楽譜」後半

【楽曲分析】

1～20小節目までの「イメージ語」はファンタジー、ダイナミクスといったアグレッシブな言葉が多く、「表現曲線」も上行している。27小節目からは素晴らしい、無償の愛といった優しい言葉が使われるようになり、「表現曲線」も落ち着いたが、後半からは再び跳躍、エクサイテッドといった挑戦的な言葉が使われ、最後は本望という強い思いで締めくくっている。

【まとめ】

彼の「イメージ楽譜」は、ダイナミクス、驚愕、エクサイテッドと外発的な言葉が多く、「イメージカラー」からも見えるように、この「イメージ楽譜」から積極性が伺えられる。「表現曲線」も独自のものを書き加え、全体的に普段表面には出さない影の部分が見えたようにも思える。事後アンケートでは、スッキリし、歌うより、自分の楽譜を創ったほうがわかりやすく楽しいと素直な回答を書いた。

【楽曲分析】

全体を通して、「イメージ語」は愛、感謝、捧げる、自然といった柔らかい言葉が多く、デザインも歌詞に沿った優しい作品となっている。1小節目～10小節目はさほど動きはないが、13小節目～音楽の方向が向上するごとにデザインも華やかになり、「イメージカラー」も変化をなしていく。後半では、デザインにかなりの動きがみられ、歌詞に沿った「表現曲線」と「イメージカラー」が選ばれていることにより、歌詞と曲調を理解していることが伺える。

【まとめ】

彼の「イメージ楽譜」は、ありがとう、愛、感謝、といった前向きな言葉が多く、彼の人の柄の良さが伺える。また、個性的なイラストが多く、普段の彼からはなかなか想像することのできない内面を見ることができた。

事後アンケートでは、自分の考えを自由に表現することができ楽しかった。他の人の楽譜も見てみたいが、自分のを見せるのは少し

恥ずかしいという回答であった。この回答から、生徒が素直な感情をこの「イメージ楽譜」に表現してくれていることが確認できた。

● 生徒F

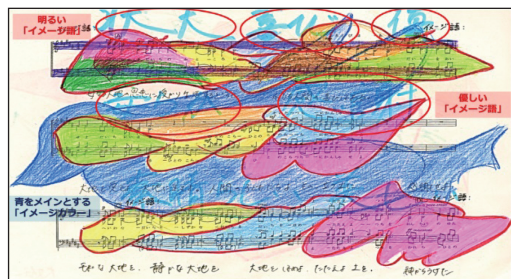


図18 生徒Fの「イメージ楽譜」前半

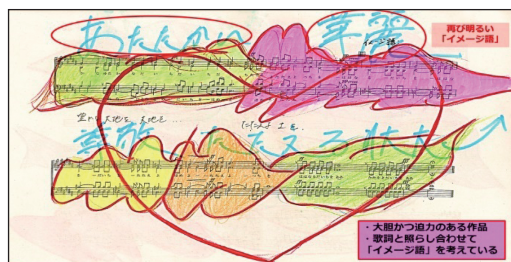


図19 生徒Fの「イメージ楽譜」後半

【楽曲分析】

1小節目～10小節目までは、壮大・喜びといった明るい言葉を選び、20小節目までは安らか、感謝といった優しい言葉、37小節目～最後まで再び華麗、尊敬、壮大といった明るい言葉を選んでいる。また「イメージカラー」では、前半は青を多く使っており、後半では黄緑、ピンクといった優しいカラーを使っている。

【まとめ】

彼の「イメージ楽譜」は上記から伺えるように大膽かつ迫力のある作品である。使っている「イメージ語」は他の生徒と大きな違いはないが、アピール力が強く、目を引く「イメージ楽譜」である。彼はよく、自分の頑張

りや成果、結果を表に出すことが多々見受けられるが、その性格と重なっているように考えられた。事後アンケートでは、「この曲の大きさを前面に伝えることができた。歌詞と照らし合わせながら「イメージ語」を考えることにより、この曲の深さがわかったような気がする。」という回答であった。彼らしい前向きで肯定的な回答であった。

以上のように、「イメージ楽譜」を作ることで、普段、内に秘めている考えや思いを表現することができた生徒が事後アンケートの結果、7割近くいるということが判明した。

④ 集団的アイデンティティを高め、インクルージョン・リーダーシップを育てる

以上6つの作品を基に、次はクラス全体でどのように合唱をしていくかディスカッションを行う。6つの作品をインクルージョンした上で、「イメージ語」、「イメージカラー」がどのように変化しているのか、そして曲の盛り上がりをもどこにもっていくのか、以上の点を順にまとめていった。

- 1) 5人～6人の6グループを作り、各々の「イメージ楽譜」を見せ合う。
- 2) 個人のダイバーシティを認めながら、なぜその色にしたのか、なぜその「イメージ楽譜」を選んだのか質問し合う。なお、自分とは対照的な生徒もいれば、同じ考えの生徒もおり、対立的な場面も何度かあったが、「イメージ楽譜」を見せ合うことで共感し合った。自ら発言することが苦手な生徒も自分の「イメージ楽譜」を通すことによりディスカッションに参加することができた。
- 3) 各グループより意見のまとまった一人の作品を選ぶ。

【イメージ語】

意見のまとまりが早く、壮大・尊敬→感

謝・愛情→迫力・力強さと変化していくことに決まった。

【イメージカラー】

「イメージ楽譜」に対する各々の「イメージカラー」は当然異なり、これをどのようにまとめていくか討論した。ここで合唱をまとめる指揮者に意見を求めたところ、各パートで異なるのもあり得るのでは？という回答であった。普段、学校生活においてさほど意見を積極的に述べる生徒ではなかったが、合唱を創り上げる上でのディスカッションということもあり、常に中立な意見を述べ、クラスをまとめようとしていた。指揮者はただ合唱をリードするだけでなく、このような場を設けることにより、個々のダイバーシティを認め、インクルーシブなディスカッションのできるインクルーシブ・リーダーシップとしても育成できた。他の生徒たちも指揮者の意見に賛成し、各パートで「イメージカラー」を合体し合いながら「イメージ楽譜」を創り上

げていった。曲の盛り上がりに関しては、音型も踏まえているが、歌詞の「感謝」、最後の「母なる大地」、「たたえよ大地」に気持ちをぶつけるという意見に多数決も交えながらスムーズにまとまった。

⑤ 合唱を実践と結果

上記でまとめた「イメージ楽譜」を踏まえ、合唱を行う。声だけで変化を生み出すことは中学生では限界があったため、完成した「イメージ楽譜」を基に教員の伴奏で変化をもたらし、違いを聴き分けさせた。壮大に歌うときには伴奏のタッチを重厚タッチに、優しく歌う時にはソフトタッチに、迫力をもたらすときには鋭角タッチに奏法を変化させた。そうすることにより生徒の歌い方にも変化が見られた。ただ強弱を付けるのではなく、優しさを出すためにゆっくりと息を出してみたり、迫力を出すために子音を強く発声したりと生徒の中でこの歌い方がいいのではないかと意見を交換しながら合唱を創り上げることができた。

今回の研究で、「イメージ奏法」を中学校における音楽の合唱の授業に取り入れることは、生徒自身の考えや思いを引き出し、それを互いに共有し、クラスを一つにまとめていく上で、大変有効であった。また、週に一回という少ない授業数の中ではあったが、「イメージ奏法」を導入することによって生徒のダイバーシティを引き出し、それぞれの生徒の多様性を可視化することによって、お互いの違いを認め合うことにつながった。また、インクルーシブ・リーダーシップを育成するために、「イメージ楽譜」の共有が役立ち、生徒の話し合いが有意義に行われた。今後の限られた授業数の中で、「イメージ楽譜」をどのように作成するか、また、その違いの中から一つの音楽的な方向性をまとめる時に、

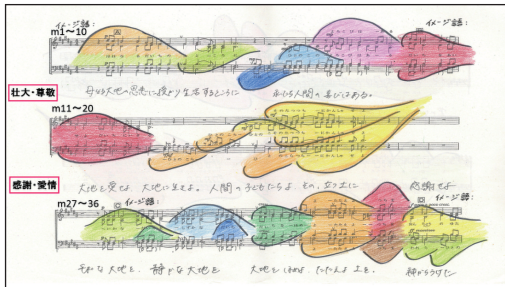


図20 クラスでまとめた「イメージ楽譜」前半

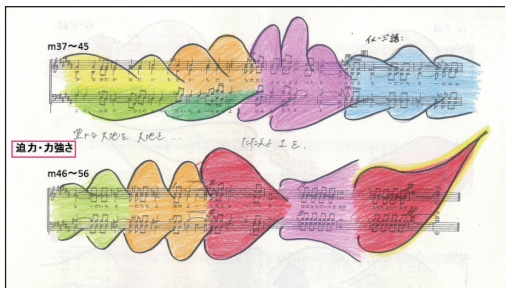


図21 クラスでまとめた「イメージ楽譜」後半

どのように「イメージ楽譜」を共有して協働作業を行い、インクルーシブ・リーダーシップを育成するかの足掛かりとなった。

IV 考察

今回、中学校の音楽の授業実践における合唱指導を通して、短い文章のメールやスタンプになれている中学校の生徒においても、音楽から受けるイメージを絵や短い言葉で、自分の思いや意図を表現できることがわかった。すなわち、集団の中で自分を表現することが苦手な学校の中で本当の自分を表出できていない子どもにおいても音楽の力で本当の自分を表出させる取組が「イメージ奏法」を活用することによってその効果があったものと思慮される。

音楽という実生活をかけ離れた想像的空間の中で、心の中に封じ込めていた本当の自分に気づき、それを音楽の中という仮想空間の中で、自分の考えを述べていく練習は、子どもの人間的育成につながり、公社会行動を学ぶことができたと確信する。

筆者武本は、教育の現場での視聴覚融合の音楽の供与により、心の活性を確信し、2017年から、医教連携プロジェクトにより、ストレスの生体に及ぼす影響とその客観的指標であるバイオマーカーとの関係を調査し「イメージ奏法」による音楽と映像の供与が、心身にどのような影響を及ぼすかを脳内物質の生理学的指標を用いた医学的な検証を行っている。

具体的には、科研費基盤研究の助成を受け視聴覚融合による生演奏により楽曲のイメージを画像化して演奏の背景に描写する「イメージ奏法」を使用し、視聴者の唾液中トリプトファン代謝産物であるキヌレニン、セロ

トニン、メラトニンを測定した。これは、「イメージ奏法」を受け取る人たちの生体に何が生じたのかについて、気分、自律神経系、視床下部下垂体副腎系及び脳腸軸からの分泌物などを用いてそれらの推移を測定し、その結果、セロトニンが持続的に増加し、引き続きキヌレニンも増加した。さらに、この両者はよく関連していたことを見いだした (Ito Y. et al. 15th International Society for Tryptophan Research Conference, Sep.18-21st, 2018)。

この研究により、視聴覚融合の音楽教育は、心の活性により効果的であることが実証され、ストレス社会に生きる人々に「イメージ奏法」を使用した音楽が生体に何かしら影響を与えていることがわかった。また、「イメージ奏法」によって、音楽が、人の心を結び付け、多様な考えがあることに気付かせてくれるとともに、想像する力の育成により、他のダイバーシティをも受容できる心を育て、誰もが納得するような創造していく力を育み、コミュニケーション・スキル、チームワークを大事に行えるインクルーシブ・リーダーシップを育成することは、極めて大切であると考えられる。

今後も、音楽の中にあるイメージを可視化して、音楽活動を通して、自己実現や学習への意欲や期待感を高め、次の課題や見通しをもつ力を育成することを取り組んでいくこととしたい。そのことが、中学生にとって、自分の変容を視覚化により自覚することにつながり、教師によるフィードバックへも活かすことができること、また、「イメージ楽譜」により友達と共有化ができ、同意や共感を得たことによる自信につながるものと考えられる。

さらに、「イメージ奏法」により、ダイバーシティを受容し、インクルーシブ・リーダー

シップを育成できることを学校現場で研究し、音楽教育の必要性を発信するとともに、音楽が心身相関に役立つことを音楽の要素と医学の両面で今後も研究を進めていきたい。なお、今後、小学校や高等学校における実践により、更なるダイバーシティとインクルーシブ・リーダーシップの育成についての探求を目指すこととしたい。

（本論文は、2015年「日本音楽表現学会」、2016年「日本音楽表現学会」、2017年「日本音楽表現学会」「日本教大協研究集会」「日本音楽教育学会」、2018年「日本教育学会」にて発表したものを、さらに進化させ、教育現場での取組をまとめたものである。）

【謝辞】

この研究は、科研費基盤研究（C）2018～2020年度（18K00206）の助成を受けたものである。

【引用・参考文献】

1. 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編
2. 武本（旧姓・中田京子）、『生徒と先生のための「楽曲イメージ奏法」』ドレミ楽譜出版社、pp.1-95、1995
3. 武本京子、「楽曲イメージ奏法」とは、ムジカノーヴァ 7月号、音楽之友社、pp.8-9、2012
4. 武本京子、『「楽曲イメージ奏法」により曲を演奏するための設計図を作ろう』ムジカノーヴァ 8月号、音楽之友社、pp.64-67、2012
5. 武本京子、『ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」解説書』音楽之友社、pp.1-40.2013
6. 武本京子、ピアノを学ぶ人へ贈る 武本京子の「イメージ奏法」によるワークブック：ブルクミュラー 25の練習曲、音楽之友社、pp.1-48. 2013
7. 武本京子『「イメージ奏法」で「人間力・心の力」を育てるレッスンを』ムジカノーヴァ 4月号、音楽之友社、pp.57-59、2014
8. 武本京子『「イメージ奏法」による音楽の構造のとらえ方とイメージに導かれた表現方法と奏法』音楽表現学第13号、日本音楽表現学会、p.91. 2015
9. 武本京子、「『イメージ奏法』の教育法」ムジカノーヴァ 5月号 音楽之友社、pp.69、2015
10. 武本京子、山口茉莉子、安田実央、松川侑里香、小坂有紀、「イメージ奏法」の楽曲分析による演奏法と教育への適用—大学でのピアノ演奏指導と小学校音楽教育での実践— 音楽表現学第14号、pp.86-87、日本音楽表現学会、2016
11. 武本京子、アクティブ・ラーニングを实践するための、「イメージ奏法」を使ったICT活用授業音楽表現学第15号、p.173. 日本音楽表現学会、2017
12. 武本京子、ICT機器を使った対話のプロセスの中で変容していく「イメージ奏法」を確立した音楽表現へ導く授業の取り組み—アクティブ・ラーニング実践授業—平成29年度日本教育大学協会研究集会発表概要集、pp.128-129. 日本教育大学協会、2017
13. 武本京子、市橋奈々、佐野美咲、安田実央、松川侑里香、山本紗友理、教育現場における「イメージ奏法」—ピアノ演奏法から教育法への展開」、音楽教育学第47巻第2号、pp.100-101. 日本音楽教育学会、2017
14. 武本京子、教育現場における「イメージ奏法」—ピアノ演奏法から教育法への展開—音楽教育学47(2)、pp.100-101、2018
15. 武本京子、「イメージ奏法」による音楽と映像が人の生理的反応に及ぼす影響（第1報）音楽による「ストレス・コントロール」の試み、音楽表現学16、pp.141、2018
16. Yasuhiro Ito¹, Tadayuki Iida, Misaki Nakashima, Midori Iwata, Kaoru Kawai, Shin Ishihara, Kyoko Takemoto Changes of Tryptophan Metabolites in Saliva by Listening to The Live Piano Music 15th International Society for Tryptophan Research Conference, Sep.18-21st, 2018
17. 武本京子、福澤維斗子、山口茉莉子、和沙舞子、創意工夫を生かした「イメージ奏法」による想像力の育成=小・中・専門学校で音楽表現向上を目指す授業の取り組み、音楽教育学48(2)、pp.72-73、2019
18. 武本京子、「楽譜」から音楽の内容を復号す

- る「イメージ奏法」の展開—音楽を理解し表現意欲を高める指導法の実践—, 愛知教育大学研究報告芸術・保健体育・家政・技術科学編68, pp.11-19, 2019
19. 武本京子, 「イメージ奏法」によるアクティブ・ラーニング音楽実践授業—汎用的能力を育成する主体的・対話的で深い学び—愛知教育大学教職キャリアセンター紀要4, pp.105-112, 2019
 20. 武本京子, 伊藤康宏, 演奏者の「イメージ奏法」を使った感情の知覚化による音楽と映像の供与—視聴者自身の音楽への「共感性」の認知から心の再生を促す試み— 2019年度春季研究発表集, pp.57-62, 日本音楽知覚認知学会, 2019